

# 富岡製糸場における尾高惇忠の活躍に関する研究

## ～明治の殖産興業を發展させた絹産業の歴史～

小金澤孝太

本研究は、富岡製糸場が建設されるまでの尾高惇忠と地域住民との合意プロセスがどのようにして行われていたのかを当時の史料や先行研究などから明らかにするものである。尾高惇忠は富岡製糸場建設に奔走する一方で、当時の地域住民たちは現在のように富岡製糸場が日本の近代化を進めるマイルストーンとなるとは予測できなかった。それは、富岡製糸場建設が国家の一大事業である程の規模であり想像することができなかったからである。そこで、明治政府は尾高惇忠たちに富岡製糸場建設の事業が円滑に実施されるように地域住民との合意が得られるように指令を出した。本研究は尾高惇忠に注目することによって合意プロセスを明らかにする。

### 1. 研究内容

本研究は、富岡製糸場の地域住民との合意プロセスについて中心人物の一人である尾高惇忠の活躍について着目する。尾高惇忠の軌跡を追うことで富岡製糸場建設のいままで明らかになっていない部分にスポットライトを当て富岡製糸場の魅力を広めるものである。富岡製糸場は全国に名が知れているのにもかかわらず分かっていないことは数多く存在する。本研究が富岡製糸場研究の一助となれば幸いである。

### 2. 文献調査

文献調査は、富岡市立図書館、群馬県立図書館及び国立国会図書館で尾高惇忠に関連する文献資料について調査を実施した。文献調査においては、まず初めに手がかりとして、「尾高惇忠」、「富岡製糸場」及び「殖産興業」キーワードを各図書館のOPAC(=オンライン蔵書目録)に対して蔵書検索を実施した。

その後、富岡市立図書館を訪問し、同館に設けられている「富岡製糸場コーナー」にある文献を基に先行研究について網羅的に収集を試みた。同コーナーには、近年の書籍から第2次世界大戦以前に発行された書籍の復刻版などの資料が配置されており、本研究を進める上で大変有力なものとなった。

また、群馬県立図書館にも訪問して関連書籍を探した。同館においては、群馬県の歴史に関する書籍の中から「富岡製糸場」、「絹産業」をキーワードに調査を進めた。

そして、群馬県内で入手困難な文献については国立国会図書館のホームページの「国立国会図書館オンライン」を用いて遠隔複写制度を利用して文献を入手した。ここでは、「尾高惇忠」にキーワードを絞って調



(文献調査の様子・撮影：小金澤)

査を進めた。その理由は国立国会図書館の蔵書は膨大であり、キーワードを絞っても関連資料を入手できると考えたからである。結果としては、富岡製糸場の建設や運営にあたって尾高惇忠の果たした役割は非常に大きいとする資料が多かった。ただ、尾高惇忠が果たした役割について子細に述べているものは散逸しておりよく分かっていない。本研究の意義はこの点を明らかにすることと考えた。

### 3. 実地調査

実地調査は、令和3年10月16日（土）に富岡製糸場を訪問し実施した。調査当日は、富岡製糸場にてパネル展「渋沢栄一と富岡製糸場」（開催期間：令和3年9月23日（木）～10月24日（日）・開催場所：富岡製糸場 国宝東置繭所（1階南側））を見学して見識を深めた。パネル展の名称は渋沢栄一であるが尾高惇忠に関する展示物もあった。



（実地調査の様子・撮影：小金澤）



（実地調査の様子・撮影：小金澤）

実際に、現地を訪れると富岡製糸場が想像していた以上に巨大な構造物であることがうかがい知れた。富岡製糸場は近代的な西洋式の製糸工場であり、これだけの規模の工場を建設できるのは国家事業でしかなしえない。また、富岡製糸場の入り口付近の広場には1873年6月に明治天皇の皇后と皇太后が行啓した大きな記念碑もあった。これは、富岡製糸場の存在が皇室関係者にも知れ渡っていることを意味するものであり、富岡製糸場が公的にもその存在意義を示す証左といえる。

そして、富岡製糸場が1872年10月の操業開始から1987年3月の操業停止までの115年間にわたって操業し続けた。その歴史的事実が意味することは建設当初の基盤がしっかりと形成されていたことである。富岡製糸場が歩んできた115年間は紆余曲折があったが現在においてもしっかりと残り続けているのは多くの人々の努力のたまものである。

### 4. 富岡製糸場建設の背景

日本は、1868年の明治維新を経て新たな政権の下に先進的な諸外国に追いつくべく、いわゆる殖産興業政策を実施した。諸外国との貿易は先進的な輸入品を購入するために日本からも輸出できる品物を用意する必要に迫られていた。



そうした中で生糸は輸出品として最適な地位にあった。当時、生糸は日本を除く世界中で供給不足に陥っていたからである。例えば、フランスやイタリアなどの西欧諸国では、蚕の病気である微粒子病が猛威を振るっていた。微粒子病は蚕の幼虫から成虫になるまでのあらゆる状態において発生した。微粒子病に対しては有効な解決策は無く原因不明の病気であった。もう一方の供給地であった中国（＝清朝）では、1851年の太平天国の乱や1856年のアロー戦争によって中国国内は混乱状態に陥っていた。こうしたことから中国産の生糸の輸出も滞っていた情勢であった。

そこで、西欧諸国の商人が目をつけたのが日本の生糸だったのである。ただ、西洋諸国の商人が開国当初の日本で生糸の貿易を行うのにはかなりのリスクを伴わなければならなかった。理由としては、西欧諸国の商人達は日本を自由に移動して貿易をすることはできなかったからである。このことに関しては今井が「当時の貿易は友好通商条約の規定に基づき居留地貿易が原則であった。」<sup>(1)</sup>と述べている。日本側は、西欧諸国の商人達に対して取引の制限を課した。「横浜の10里以内の行動に制限されており、したがって取引（原文ママ）が成立するためには日本側の商人が横浜に品物を持ち込んで売買する方法が取られたのである。」<sup>(2)</sup>

この点に一部の日本人の商人が付け込んだのである。一部の日本人の商人は生糸の産地を偽装したり生糸に括り付ける紐を重い物に細工したりした。そのため、西欧諸国の商人は商品を手に入しても念入りに品質を確認する手間がかかった。西欧諸国の商人は明治政府に対してこうした事態の改善を図るよう度々抗議をした。

こうしたことから明治政府は主力輸出品である生糸の品質向上を迫られていたのである。そのため、明治政府は官営模範工場としての製糸場建設をすることを決定したのである。明治政府は製糸場建設候補地を模索する中でフランス人技師のポール・ブリューナの協力を仰ぎながら各地を視察の後に養蚕が盛んだ富岡町（現在：群馬県富岡市）を選んだ。

この富岡製糸場建設に対して、今井は著書『富岡製糸場と絹産業遺産群』において地域住民側から全く異論がなかったと主張している。その理由として、地域住民の全員一致の賛成が得られたとして当時の地域住民の署名が記された同意書である「上野国富岡製糸場設立ノ儀伺」を証拠史料として挙げている。この地域住民の同意書は正式な文書であり、かつ歴史的史料である。

一方で、当時の実情を記した藤本の著書である『富岡製糸所史』には富岡製糸場建設が全員一致の賛成に至るまでには相当の労力を得たとも記している。当時の群馬県西部地方には江戸時代から続く外国人への排他的意識である攘夷思想という考えが明治維新を経ても存在していた。また、富岡製糸場建設計画が巨大な構想であったため一部の地域住民には事業の成功が考え及ばなかった<sup>(3)</sup>。明治政府の意向を受けて富岡製糸場建設に奔走する尾高惇忠達は攘夷思想の残渣がある地域住民の説得工作に苦勞した。今井の論にはこうした地域住民が富岡製糸場建設に同意した経緯に関する状況についての記述が欠如している。

本研究は、富岡製糸場建設に関する史料や文献などを再検討し当時の地域住民の視点はどのようなものだったかを明らかにすることを目的とする。そして、当時の地域住民は富岡製糸場建設に対して経済的先見性を見据えたことで反対から賛成へと態度を変えたとする仮説を提唱する。地域住民が経済的価値を重視していた証拠として近隣の神社である貫前神社と妙義神社の2社の灯籠に蚕糸業の商売繁盛を祈願する文字が刻まれている。貫前神社は竿部に「養蚕倍盛 商売繁盛 四海静謐 五穀豊穰」とあり、妙義神社の竿部には「奉納永代御神燈籠 養蚕倍盛 商売繁盛」、「諸国糸繭商人 諸商人 養蚕人」とある<sup>(4)</sup>。

なお、地域住民の定義については今井の著書では明確にはなっていない。本稿では地域住民について富岡製糸場建設予定地の土地の持ち主及び同意書に署名した336名とする。この336名は地方三役と百姓などから構成されている。

理由としては、富岡製糸場の敷地は耕作地としては不適合であり工業用地として活用する方が効率的であったことを挙げることができる。さらに、明治政府が富岡製糸場建設予定地の買収価格に5カ年分の平均作付け代を上乗せして計上していたことも地域住民の同意を促進させたと考えられる。

このように、地域住民は富岡製糸場の建設によって養蚕業の活性化が図られるということに気づいたのである。また、地域住民が外国人に対して忌避的な態度を示していたことは尾高惇忠達が熱心な説得によって心情が変化したことも大きい。そして、地域住民が富岡製糸場建設に賛同した決め手の一つとなったのは土地の買収価格が実際の地価よりも大幅に優遇して買い取った明治政府の熱心さもあると考えられる。



(貫前神社・画像提供：富岡市)



(妙義神社の本社・画像提供：富岡市)

## 5. 富岡の形成過程

富岡のまちの起源は中野七蔵代官が富岡新田というまちづくりを立案した事から始まったといわれている。中野代官は地元の人物ではなく、たまたま赴任したのが富岡の地であった。そんな中で、中野代官は富岡の地の開発事業に手を付ける事になった。<sup>(5)</sup>

ただ、富岡という土地は戦国時代においては、上杉・武田・北条の戦国大名の3氏が激突する地であったため土地が荒廃してしまっただけでなく、人が住むには適さない土地になってしまった。このような富岡の地をめぐる事情があったため、中野代官の富岡新田計画は土地造成まで済んだものの肝心の住民がいない状況にあった。

そこで、中野代官は住民の誘致活動をする必要に迫られた。中野代官は、富岡の北西に位置する集落である宮崎村（現在：富岡市）の住民に富岡に移住するよう説得工作をした。ただ、住民が移住に同意するためには何らかの便宜を図る必要があった。そうでなければ、宮崎村の住民は生計が成り立っているのに新たな地に移住する事を決意しなかった。

中野代官は宮崎村の住民に移住の際に二つの点について便宜を図る約束をした。一つ目は、富岡の地での市の開設を許可するというものである。二つ目は、後述する砥沢村（現在：南牧村）から産出する砥石の輸送利権を付与するというものである。

ここで、砥沢村の砥石の件について触れると、富岡の西方に砥沢村という集落が存在した。当該集落は砥石を多く産出していた。砥石は武士の世の中である江戸時代には刀を研磨するのに必要不可欠な物品であった。

やがて、富岡の地は砥石を輸送する中継地として賑わいを見せた。中野代官は砥石輸送を商人の奈良屋に任せた。この奈良屋は優秀な業者だったといわれている。奈良屋が優秀さを示す事例として砥沢村の砥石を

江戸幕府に売り込み御倉砥という幕府御用達の砥石として認めさせたのである。

この幕府御用達の砥石というある意味でブランドイメージを砥沢村の砥石に結び付けることに成功したのは富岡の商業を活気づけた。砥沢村の砥石は大いに利潤を上げたが、その背景には品質の高さよりもブランドイメージによる効果が高いとの指摘もある。<sup>(6)</sup>

しかし、隆盛を誇った砥沢村の砥石は幕末期に近づくや衰退の一途を辿る。そこには二つの理由があった。一つ目の理由は、砥石の産出量が減少したからである。主な砥石の鉱山は掘りつくしてしまい、末期には川原で落ちている砥石を採集するほどまで砥石が無くなってしまったのである。二つ目の理由は、砥石の需要の減少である。時代が明治になり日本から武士階級が姿を消していったため刀の時代は終わりつつあった。それに比例して、砥石の需要も減少したためである。

この砥石事業の衰退は富岡の商業に大きな衝撃を与えた。富岡の商業は砥石の輸送事業が主要な産業となっていたからである。そのため、富岡は砥石事業の衰退と同時に元の寒村に戻る危機に直面していた。この時に、富岡の商業を復活させる大きな契機となったのが富岡製糸場建設計画である。

## 6. 尾高惇忠の生涯

尾高惇忠は、江戸時代の武蔵国榛澤郡下手計村（現在：埼玉県深谷市）に1830年に生まれた。尾高惇忠の幼少期は学問に精を出していた。例えば、尾高惇忠は「七歳の時、『四書』の教えを村の長老から受ける」と理解力の高さを見せ、早くもその才能を現しました。一方、書道を渋沢宗助に学び、さらに当時血洗島村（現在の深谷市血洗島）で塾を開いていた儒者から『五経』の講義を受けます。読書力の進展に伴い、歴史や小説類にも手をのぼし『太閤記』『後風土記』『三国志』、曲亭（滝沢）馬琴の『八犬伝』、『赤穂義士伝』など、寸暇を惜しんで愛読しました。<sup>(7)</sup> というエピソードも伝わっている。尾高惇忠が幼少期より周囲の人々から期待され、かつ尾高惇忠も周囲の期待に応えるべく勉強に勤しんだと考えられる。

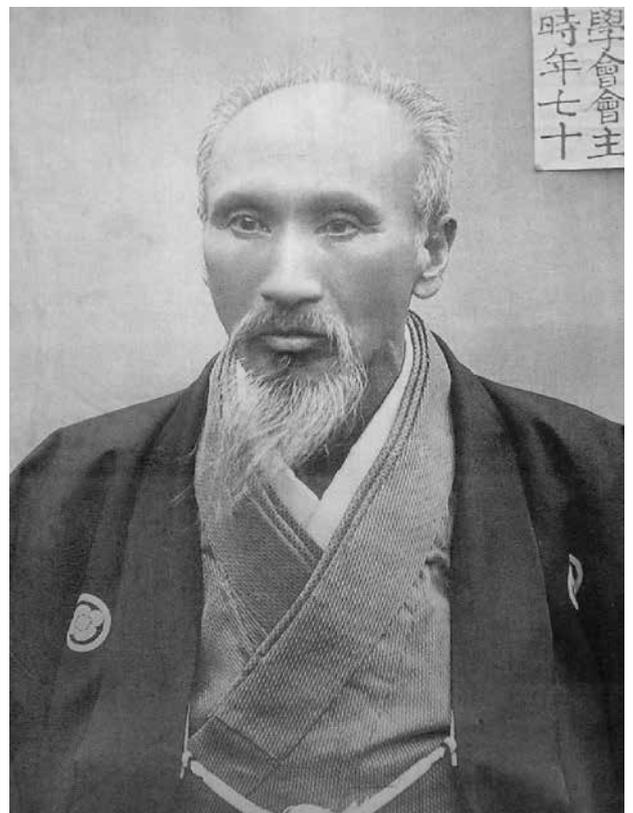
そして、実家の尾高家は農業のほか塩などの日用品の販売と藍玉の製造販売業を営んでいた。尾高惇忠は伯父である渋沢宗助の手伝いをしながら学んでいたため養蚕にも詳しくあった。

尾高惇忠は幕末の混乱期を生き抜き紆余曲折あって明治維新後は政府の役人として富岡製糸場の選定に尽力して初代場長にも就任した。

尾高惇忠と富岡製糸場の関係については後述するが、人との関わりについての必要なことを熟知していたことが成功へと導いたといえる。

尾高惇忠は、富岡製糸場長を引退後は、渋沢栄一が築き上げた第一国立銀行の盛岡支店の支配人に就任した。尾高惇忠は盛岡の地でも精力的に活動した。尾高惇忠は盛岡の若手実業家を集め彼らに新しい経済理論などを伝授して回った。

その後、晩年を迎えた尾高惇忠は隠居生活に入るが、この時期にも積極的に養蚕などの学問についての研究を実施していた。その研究生活の実態は書物を調べて文章を書くなど幼少期の尾高惇忠と変わら



(尾高惇忠肖像写真・画像提供：渋沢栄一記念館)

ないものだった。そして、1901年1月2日に東京の渋沢栄一の別邸で72歳の生涯を終えることになった。尾高惇忠は富岡製糸場の計画から初期の経営に至るまで大きな貢献をした人物である。そして、尾高惇忠は学問を実践に生かし富岡製糸場の建設を成し遂げた。

## 7. 尾高惇忠と富岡製糸場

尾高惇忠はフランス人技術者のポール・ブリューナ達と近代西洋式製糸工場を建設するための候補地選定のために信州、秩父や富岡などの地を視察した。その結果は、国際貿易港である横浜港から近く、養蚕が盛んな地域であり、地域住民の理解を得ている点などから富岡に製糸場を建設すべきというものだった。この視察の報告は伊藤博文などの政府要人達に伝達され、最終的に富岡の地に製糸場を建設するという案がまとまった。

尾高惇忠は富岡製糸場の建設計画が政府から承認されると現地の担当者として奔走した。具体的には住民説得と資材調達の2点について着手した。住民説得の件は妙義山材木事件が代表的なものとして扱われている。妙義山材木事件とは富岡製糸場建設の際に必要な建物の材木を妙義山周辺の森から調達しようとして住民の反対運動に直面した事件を指す。住民達は妙義山に由来する神の象徴である天狗が森の木を伐採する事に対して罰が当たることを非常に畏れたのである。尾高惇忠は住民達に対して富岡製糸場建設は日本の国家事業である旨を伝えて同意を得ようとした。住民達は尾高惇忠の熱意に共感して妙義山の森の木を伐採する事を容認した。このようにして、尾高惇忠は妙義山材木事件を解決に導いた。



(妙義山の森林・画像提供：富岡市)

また、尾高惇忠は富岡製糸場の用地買収においても頭を悩ますこととなる。尾高惇忠は富岡製糸場の経営が円滑に進むように地権者達と同意書を得ることに成功した。この用地買収の成功の背景は前述したように富岡の地が農業より商業が活発な土地であることが理由として挙げられる。実際に富岡製糸場の建設予定地は農業用地としては不適な土地であることが「小幡領瀬下郷御縄打水帳」や「小幡領新田御縄打水帳」などの史料から分かる。それは、富岡製糸場の建設予定地の地目が「山成」や「永畑」といった農業に適さないとして記述されている。

次に、資材調達の件は、近代的な西洋式製糸工場である富岡製糸場建設のために明治初期の日本には存在しなかった資材を富岡周辺の地域や尾高惇忠の郷里などから代用できるもので用意した。例えば、レンガは、尾高惇忠の同郷の葦塚直次郎に依頼して現在の埼玉県大里郡から調達した。このようにして、尾高惇忠は資材調達の件も解決した。<sup>(8)</sup>

さらに、富岡製糸場で働く工女の件も懸案事項であった。前述の通り攘夷思想の残渣があった明治初期においては外国人に対するイメージは悪いものが大勢を占めていた。富岡製糸場の工女募集の際にもこの誤解を解くことから始めていかななくてはならなかった。

そのため、尾高惇忠は娘の勇<sup>ゆう</sup>を富岡製糸場の工女として働かせることを計画した。勇は当初は難色を示したが父の熱意に勇も最終的に同意して富岡製糸場の工女のさきがけとなった。勇が富岡製糸場において懸命に働いたおかげもあって徐々に工女も各地より集まるようになった。富岡製糸場で働いた工女達の中には、郷里に戻った後にその地の養蚕業の先達者となる人物も現れるようになる。こうして、富岡製糸場がハード面とソフト面ともに整うことになった。尾高惇忠は富岡製糸場の初代場長に就任し、草創期の経営を担うこ

とになった。

## 8. おわりに

富岡製糸場が建設されたことは今日の人々からすると成功した事例として語られている。例えば、富岡製糸場の発展を描いた鮮やかな錦絵が中学校や高等学校の多くの歴史の教科書に掲載されており、殖産興業の成功のシンボルとなっている。

しかし、富岡製糸場が建設される頃の当時の日本は幕末から明治維新にいたる混乱の中にあった。当時の



(東置繭所キーストーン・画像提供：富岡市)



(富岡製糸場東置繭所正面・画像提供：富岡市)

日本政府の財政状況は戊辰戦争などの莫大な戦費をかかえており順風満帆ではなかった。そんな中で、明治初期の人々からみると富岡製糸場の建設が成功するとは必ずしも予測できなかった。

そして、尾高惇忠は富岡製糸場を建設計画構想段階から経営に乗り出すまで関与し続けた。尾高惇忠は先進的技術者でかつ外国人であるポール・ブリューナ達と協力しながら候補地選定の視察を行ったり、地域住民との合意を得るまで説得を行ったり、娘の勇を工女として協力をとりつけて他の工女が富岡製糸場で働きやすくさせたりと、その功績は計り知れない。

## 9. 注

- (1) 今井、2006年、p 6
- (2) 今井、2006年、p 7
- (3) 藤本、1943年、p17に製糸場建設計画を嘲笑した人の記述がある。
- (4) 今井、2006年、pp. 41-42
- (5) 富岡史編纂委員会、1955年、p60
- (6) 富岡史編纂委員会、1955年、p90
- (7) 荻野、2015年、p 4
- (8) 富岡史編纂委員会、1955年、pp. 716-722

## 10. 参考文献

(書籍)

- 明石弘『近代蚕糸発達史 蚕糸業の発達と其の政策』(明文堂・1939年)  
赤レンガ物語をつくる会『赤煉瓦物語』(あさを社・1986年)  
アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新(上)』坂田精一(岩波書店・1960年)  
石井寛治『日本蚕糸業分析』(東京大学出版会・1972年)  
今井幹夫『甘楽富岡史帖』(みやま文庫・1992年)  
今井幹夫『富岡製糸場初期経営の諸相』(朝日印刷・1996年)  
今井幹夫『富岡製糸場の歴史と文化』(みやま文庫・2006年)  
今井幹夫『南三社と富岡製糸場』(上毛新聞社・2011年)  
今井幹夫『富岡製糸場と絹産業遺産群』(KKベストセラーズ・2014年)  
江波戸昭『蚕糸業地域の経済地理学的研究』(古今書院・1969年)  
萩野勝正『尾高惇忠』(さきたま出版会・1984年)  
群馬県史編さん委員会『群馬県史 通史編7 近代現代1』(群馬県・1989年)  
群馬県史編さん委員会『群馬県史 通史編8 近代現代2』(群馬県・1989年)  
高木賢『日本の蚕糸のものがたり』(大成出版・2014年)  
高崎経済大学地域科学研究所『近代群馬の養蚕業』(日本経済評論社・1992年)  
高崎経済大学附属産業研究所『群馬産業遺産の諸相』(日本経済評論社・2009年)  
高崎経済大学地域科学研究所『富岡製糸場と群馬の蚕糸業』(日本経済評論社・2016年)  
高橋経済研究所『日本蚕糸業発達史 上巻』(高橋経済研究所・1941年)  
高橋幸八郎『蚕糸業の発達と地主制』(御茶の水書房・1958年)  
高村直助『産業革命』(吉川弘文館・1994年)  
東京書籍編集部『世界文化遺産 富岡製糸場』(東京書籍・2014年)  
富岡史編纂委員会『富岡史』(富岡市、1955年)  
富岡市史編さん委員会『富岡市史 近代・現代通史編・宗教編』(富岡市・1991年)  
富岡市史編さん委員会『富岡市史 近代・現代資料編(上)』(富岡市・1989年)  
富岡市史編さん委員会『富岡市史 近代・現代資料編(下)』(富岡市・1989年)  
富岡製糸場誌編さん委員会『富岡製糸場誌(上)』(富岡市教育委員会・1977年)  
富岡製糸場誌編さん委員会『富岡製糸場誌(下)』(富岡市教育委員会・1977年)  
富岡製糸場世界遺産伝道師協会『富岡製糸場事典』(上毛新聞社・2011年)  
藤本實也『富岡製糸所史』(片倉製糸紡績株式会社・1943年)  
藤本實也『開港と生糸貿易(上)』(名著出版・1987年)  
藤本實也『開港と生糸貿易(中)』(名著出版・1987年)  
藤本實也『開港と生糸貿易(下)』(名著出版・1987年)  
文化財建造物保存技術協会『旧富岡製糸場建造物群調査報告書』(富岡市教育委員会・2006年)  
宮崎俊弥『群馬県農業史(上)』(みやま文庫・2007年)  
宮崎俊弥『群馬県農業史(下)』(みやま文庫・2009年)

(論文)

- 上西英治「日本の絹産業から見た富岡製糸場の歴史意義」『地域政策研究』第18巻第4号(高崎経済大学・2016年)

(謝辞)

本研究を進めるにあたり、尾高惇忠の肖像写真をご提供いただきました渋沢栄一記念館、富岡製糸場等の画像を提供いただきました富岡市及び絹ラボの主催・運営をしてくださったシルクカントリー群馬プロジェクト実行委員会には多大なるご支援とご協力を賜りましたことを厚く御礼を申し上げます。